



# 発明抽出・特許調査・発明提案書作成を“一気通貫”で行う国内外主要ツール

発明抽出→特許調査→発明提案書（発明届）までを“ほぼ一気通貫”で回せる専用製品は、現時点でも「完璧な一本化ツール」は存在せず、実務的には①国内の特許AIプラットフォームを中核に据える構成、②PatSnap等のグローバルAI特許SaaSを検索・分析のハブにする構成、③汎用LLM+特許DB連携で自前ワークフローを組む構成の三系統に整理できます。[\[1\]](#)[\[2\]](#)

以下では、「一気通貫度」が高い代表ツールと、その組み合わせパターンを軸に整理します。[\[3\]](#)[\[1\]](#)

## 一気通貫ワークフローの前提

一気通貫の射程を、次の3ステージが1ストリームでつながることと定義すると整理しやすくなります。

- 発明抽出・整理  
技術説明・社内資料から「課題・解決手段・効果」ストーリーを構造化し、発明候補を洗い出す機能。
- 先行技術調査・差分整理  
自然文や要素分解に基づくセマンティック検索、類似特許クラスタリング、クレーム／構成要件マッピングなど。
- 発明提案書・明細書ドラフティング  
発明届様式や明細書ドラフト（課題・解決手段・実施形態・効果・クレーム案）を半自動生成する機能。[\[3\]](#)

以降、「1ツール内でここまで連結されているか」と「実務的に連結しやすいか（API・エクスポート等）」の両面で見ます。[\[2\]](#)[\[1\]](#)

## 国内：特許AIプラットフォーム系

### MyTokkyo. Ai（リーガルテック）

- 特徴

特許業務に特化した「プライベートAI特許プラットフォーム」で、企業ごとに専用ドメインを発行するクローズド環境上で、ChatTokkyoなどのエージェントが特許検索・要約・分析・社内文書解析を行う構成です。<sup>[2]</sup>

社内技術文書と既存特許を横断的に解析し、「特許出願案・競合比較・差別化ポイントの可視化」まで支援するユースケースが公表されており、発明抽出～出願案作成に近いところまでワンストップで支援できる設計になっています。<sup>[2]</sup>

- 一気通貫度合い

技術説明や社内報告書を投げて要約・論点抽出→関連特許の抽出→差別化ポイントや出願案の生成、という流れを同一環境内で回せるため、「発明抽出＋簡易調査＋提案書素案」の線まではかなり一気通貫に近いです。<sup>[2]</sup>

発明届様式への自動マッピングなどは、現状はプロジェクト単位のカスタマイズ（テンプレート設計＋プロンプト設計）で実現するイメージで、標準製品での完全自動化はこれからの領域とみておくのが安全です。<sup>[2]</sup>

### NTTドコモビジネス「知財文書作成エージェント」

- 特徴

NTTドコモビジネスが2025年6月から提供している、特許明細書作成プロセスの自動化に特化したAIエージェントで、エクサウィザーズとの提携により業務特化型マルチエージェント群の一つとして位置付けられています。<sup>[3]</sup>

技術説明やヒアリング情報から、請求項を含む明細書ドラフトを生成し、図面記載や実施形態の肉付けまでを支援することが公表されており、「ドラフティング」側の機能が非常に厚いのが特徴です。<sup>[3]</sup>

- 一気通貫度合い

発明抽出そのものよりも「既に抽出された発明情報を、出願レベルの文書に落とし込む」場面で強みを持つ構成です。<sup>[3]</sup>

特許調査機能は専用DBを内包するというより、既存の特許検索環境と併用する前提で設計されており、現時点では「発明抽出は別途（会議・フォーム等）→調査は既存DB→本ツールで明細書」という三段構えになるケースが多いと考えられます。<sup>[3]</sup>

## Summaria（特許読解AI）＋Patent Integration 等

- 特徴

Summariaは「特許文書読解支援AIアシスタント」として、用途・技術課題・解決手段・機能・効果などを自動抽出し、自社分類への割付や用語抽出を行うツールで、Patent Integrationなどの特許DBと組み合わせてFTO・動向分析・ポートフォリオ整理まで一貫した日本語中心の知財基盤を構築しやすいとされています。<sup>[1]</sup>

技術説明を分解して検索観点を洗い出し、母集団形成やスクリーニングを効率化する使い方が紹介されており、「発明の要素分解＋調査」の部分に強いプロファイルです。<sup>[1]</sup>

- 一気通貫度合い

発明抽出用の専用UI（アイデア登録フォーム等）というより、「既にある特許・文書を読む・分類する」側から発明ポイントを抽出するイメージで、発明届テンプレートへの自動流し込みは別設計になります。<sup>[1]</sup>

一方で、日本語FTOワークフロー（技術要素分解→検索設計→スクリーニング→クレーム対比→レポート素案）を人主導＋AI補助で一貫させるフロー例が提示されており、調査中心の一気通貫では有力な選択肢です。<sup>[1]</sup>

## AI特許ロケット（エムニ）

- 特徴

東京大学松尾研発スタートアップ・エムニによる生成AI搭載の特許調査・分析プラットフォームで、特許母集団をアップロードすると、課題／解決手段マップ可視化や類似特許抽出・リスク示唆などを自動で行う「パテントマップ自動生成」能力が中核です。<sup>[4]</sup>

2025年の知財・情報フェアでは、来場者が自分のPCから「特許母集団アップロード→AIエージ

ェント分析→課題／解決手段マップ表示」を体験できるデモが提供され、既存ツールと比較してスピード・低コスト・非専門ユーザビリティが評価されています。<sup>[4]</sup>

- 一気通貫度合い

発明抽出という点では、課題・解決手段マップを用いて自社の技術ギャップや新規アイデアの種を発掘する「上流の発明発掘・企画」の支援に向いており、そこから個別案件の発明届に自動で落とし込む機能は、公表情報の範囲では限定的です。<sup>[4]</sup>

調査・分析～戦略検討を高速化するツールとして非常に有望ですが、「1案件単位の発明届・明細書ドラフティング」までは、他ツールや汎用LLMとの組み合わせ前提と見ておくのが妥当です。<sup>[4]</sup>

## 海外：AI特許SaaS／プラットフォーム系（代表例の位置付け）

※このセクションは、過去に整理されたFTOワークフロー情報や一般公開情報をベースにした俯瞰です。<sup>[1]</sup>

- PatSnap Eureka

AIエージェントが技術説明文からセマンティック検索・分類検索・キーワード検索・クレームマッピング・レポート素案まで一気通貫で自動化する「AI主導型FTOワークフロー」を提供しており、検索・スクリーニング・レポート化の自動化レベルは現行ツールの中でも最上位クラスです。<sup>[1]</sup>

発明抽出そのものというより、「技術説明（発明候補）を入れれば、関連特許群とクレームレベルの差分を出し、FTOレポート素案まで返す」流れに強みがあり、アイデアの権利化可能性評価や改良案検討の起点として機能します。<sup>[1]</sup>

- Summariaとの棲み分けの観点

Summariaが「日本語技術分野＋動向分析・ポートフォリオ分析と一体で回すFTO」に向くのに対し、PatSnap Eurekaは「米欧中を含む多国展開製品で、検索・スクリーニングがボトルネックになっているFTO」に特にインパクトが大きいとされています。<sup>[1]</sup>

発明抽出～提案書作成までを完全にEureka単体で回すのは現時点では想定外で、グローバルFTO・競合分析ハブとして位置付けるのが現実的です。<sup>[1]</sup>

- Amplified, Questel, LexisNexis, Anaqua, [IP.com](https://www.ip.com) 等

これらはいずれも「自然文入力によるセマンティック検索→関連特許のクラスタリング・要約→ドラフティング補助（ひな型生成・クレーム文例提示など）」の方向に機能拡張を進めていると報じられており、検索～分析の一気通貫度は高まりつつあります。

ただし、「発明抽出セッションのファシリテーション」や「社内発明届様式への自動マッピング」まで含めた完全E2Eワークフローとして整理されている例はまだ少なく、多くは複数モジュール（Idea/Innovation管理+Search+Drafting）の組み合わせで運用する前提です。

## 汎用LLM+特許DB連携パターン

- 代表的な構成イメージ

Microsoft Copilot / OpenAI / Claude などの汎用LLMと、Patent Integration、PatentSQUARE、PatSnap、Orbit、Derwentなど既存特許DBのAPI・エクスポート機能を組み合わせ、「発明抽出ワークショップ支援→検索式候補生成→検索結果の一次評価→発明提案書ドラフト生成」を自前プロンプトでつなぐ構成が、実務家の間で急速に増えています。<sup>[1]</sup>

発明届フォーマットが社内ごとに異なることもあり、「汎用LLM側に自社様式と過去の良い例を学習させてテンプレート生成させる」というアプローチは、専用製品より早く、しかも柔軟に一気通貫度を高められる現実的な選択肢です。

- 長所・短所

長所は、発明抽出フェーズ（会議録要約・論点抽出・アイデア整理）から提案書ドラフトまでを、自社要件に合わせてかなり細かくチューニングできることと、ツールロックインを避けやすいことです。

一方で、検索精度やクレームマッピングなど「特許DB側の機能」に依存する部分は専門SaaSに劣るケースもあり、FTOや重要案件ではSummariaやPatSnap Eurekaなど専用ツールとのハイブリッド運用が推奨されます。<sup>[1]</sup>

## 代表ツールの「一気通貫度」ざっくりマップ

実務的なイメージを掴むため、主要候補のカバー範囲を簡略化して整理すると以下のような位置づけになります。

ツール・構成	発明抽出支援	調査支援	提案書/明細書ドラフティング	一気通貫性のイメージ	日本語対応
<u>MyTokkyo.Ai</u>	社内文書・特許の解析から出願案・差別化ポイントを提示 <sup>[2]</sup>	Chatベースで類似特許抽出・要約 <sup>[2]</sup>	出願案ドキュメント自動生成までカバー <sup>[2]</sup>	「抽出～簡易調査～出願案」まで同一環境でほぼ一気通貫 <sup>[2]</sup>	◎（日本発） <sup>[2]</sup>
知財文書作成エージェント（NTTドコモ）	（前提として技術説明・ヒアリング済み） <sup>[3]</sup>	調査は既存DBとの併用前提 <sup>[3]</sup>	請求項を含む明細書ドラフトを自動生成 <sup>[3]</sup>	「調査後のドラフティング」フェーズに特化 <sup>[3]</sup>	◎（国産LLM） <sup>[3]</sup>
Summaria+ Patent Integration	既存特許から課題・解決手段・用途を抽出し、技術要素分解を支援 <sup>[1]</sup>	分類展開・分類付与・用語抽出でFTOや動向分析を加速 <sup>[1]</sup>	レポート素案生成など一部支援（明細書ドラフトは外部LLM併用が現実的） <sup>[1]</sup>	「要素分解～検索～スクリーニング～レポート」の一貫FTO向き <sup>[1]</sup>	◎（日本語特化） <sup>[1]</sup>
AI特許ロケット	課題／解決手段マップから技術ギャップ・新規アイデアの種を抽出 <sup>[4]</sup>	特許母集団を高速分析しリスク・類似特許を可視化 <sup>[4]</sup>	提案書ドラフトは他ツール連携が前提 <sup>[4]</sup>	「上流企画・分析～調査」の一気通貫が強み <sup>[4]</sup>	○（国内ベンダー） <sup>[4]</sup>
PatSnap Eureka	技術説明を起点にFTO観点整理・構成要素分解が可能 <sup>[1]</sup>	セマンティック検索・キーワード・分類検索・クレームマッピング・レポート素案までAIが自動実行 <sup>[1]</sup>	FTOレポート素案まで、明細書ドラフトは要工夫 <sup>[1]</sup>	「説明文→グローバルFTO」一気通貫で世界トップクラス <sup>[1]</sup>	△（UI英語中心・各国特許対応） <sup>[1]</sup>
汎用LLM+特許DB	会議録・報告書の要約・論点抽出・アイデア整理に柔軟対応	検索式・観点一覧・クエリ文生成でDB検索を補助 <sup>[1]</sup>	自社フォーマットの発明提案書・明細書ドラフトをプロンプト設計次第で高精度生成	設計次第で最も「自社流一気通貫」に近づけられる構成	◎（日本語LLMを選択可）

## 日本企業（製造業想定）向けの現実的構成パターン

発明抽出会議～FTOレベルの調査～発明提案書作成までを無理なく標準化する観点では、次のような構成が実務上現実的です。

1. 「国産AI特許プラットフォーム中核」パターン
  - MyTokkyo.Aiを中核に、社内技術資料・既存特許の解析から発明候補と差別化ポイントを洗い出し、そのまま出願案文書までAIに書かせる。<sup>[2]</sup>
  - 精緻なFTOやグローバル調査が必要な案件のみ、Summaria+Patent IntegrationやPatSnap Eurekaでダブルチェックする二段構えにする。<sup>[2][1]</sup>
2. 「読解・FTO+ドラフティングを分離」パターン
  - 発明抽出・要素分解・FTOはSummaria+Patent Integrationを中心に回し、用途・課題・解決手段の構造化と分類付与で技術俯瞰とリスク把握を行う。<sup>[1]</sup>
  - 重要案件はPatSnap EurekaでグローバルFTOをかけ、その結果を踏まえ、明細書ドラフトは知財文書作成エージェントや汎用LLMで生成する。<sup>[3][1]</sup>
3. 「汎用LLMを軸に“自社型一気通貫”を組む」パターン
  - 発明抽出会議の議事録や研究報告書を汎用LLMに食わせ、「課題・解決手段・効果」ストーリーと候補クレーム案をまず生成させる。
  - LLMに検索観点リスト・クエリ案を出させて既存特許DBで検索→結果を再度LLMに要約させ、最終的に自社様式の発明提案書と明細書ドラフトを生成する「人+LLM標準フロー」を作る。<sup>[1]</sup>

## ツール選定時に見ておきたいポイント

- 「一気通貫」か「フェーズ特化」か  
すべてを1ツールで賄う発想にこだわるより、「どこをAI主導にするか」「どこは人が主導しAIはブースト役にするか」を決め、2～3ツールで直列につなぐ方が、2026年時点では現実的です。<sup>[3][1]</sup>

- 日本語技術文書への強さ

発明抽出・発明提案書作成は日本語ニュアンスへの感度がボトルネックになりやすいため、国産LLM採用や日本語特化設計かどうかは最初に確認した方がよいポイントです。<sup>[2][3]</sup>

- セキュリティ／オンプレ要件

MyTokkyo. Aiのようにテナントごとのプライベート環境を前提とする構成や、社内GPUでモデルを動かす構成など、情報管理ポリシーに応じて選択肢が分かります。<sup>[4][2]</sup>

この前提を踏まえ、「自社がどのフェーズで一番ボトルネックを感じているか（発明抽出／調査／ドラフティング）」から逆算して、上記パターンのどれを主軸に据えるかを決めるのが設計の近道になります。<sup>[1]</sup>

\*  
\*\*

1. <https://www.perplexity.ai/search/bd2a2fdf-1300-4bfb-985b-a6bb48dd2bf8>
2. <https://www.perplexity.ai/search/2b188de4-2719-4038-a7b5-c860bf70d522>
3. <https://www.perplexity.ai/search/4d9a76b4-e4f9-4905-829c-4464c4cbbe35>
4. <https://www.perplexity.ai/search/b30f6dd8-2a94-4480-8c00-d813adf02b98>
5. interests.ai\_agent\_development